

## 響きあい

Vol.2

平成 30 年 1 月

新年号

みんなの「生きる」を  
社会福祉法人



## 《巻頭言》

老人福祉施設カリヨンの郷

施設長 早川直也

新年おめでとうございませう。  
新しい年を迎え、昭和の時代も遙か昔になりつつあり、

いよいよ「平成」もカウント  
ダウンが始まりました。

まだ、平成時代を語るには  
至りませんが、昭和の真ん中  
を歩んできた自分と重ねる  
と、平成時代は進化のスピー  
ドが早すぎて「戸惑いの連続」  
の時間でした。いわゆる、ア  
ナログからデジタルへの移行  
期で秒針が無い時計では計る  
ことができない時間があるこ  
とも意識し、私からの希望は、

歯車が時を刻むように、もう  
少しゆつくりと時が流れるの  
を意識するなど、心のゆとり  
がほしいものです。

インターネットが発達し  
て、瞬時に情報が得られるよ  
うにはなりましたが、反面失  
ったものも多く、多くの弊害  
や問題も出ています。

先日、一部の若者の間で文  
通の良さが見直されつつある  
旨の記事を目にしました。

私が中学生だった頃には個  
人情報の問題は本当に緩く、  
各種雑誌に文通友だち募集  
(ペンフレンド)のコーナー  
がありました。文通を始める

には、便箋や封筒、筆記具、  
切手などを選び、相手の生活  
環境などへの思いを巡らせ、

一文字一文字を丁寧に、辞書  
を片手に推敲しながら書き留  
める必要があります。双方の  
手紙のやり取りにも時間がか  
かり、それらを待つ時間も楽  
しみでもありました。

電子メールやSNSが全盛  
の時代、「手書きの温かさや、  
ゆつくりとした時間を味わう  
気持ち」は、『古き良き時代』  
への緩やかな回帰の流れとし  
て、自然な気持ちの表れだと  
思います。

また、最近の若者のコミュ  
ニケーション力不足を嘆く前  
に、私を含め伝えるべき大事  
なものを伝えることができな  
かったことを大いに反省し、  
あらゆる世代の方たちとも、  
直接顔と顔を合わせて言葉を  
交わし、互いの表情から気持  
ちを感じ取り、相手を理解し  
ようと努力が大切であると、  
改めて感じています。